



研究者名※	田中恵美子 TANAKA Emiko	学位※	博士(社会福祉学)
所属※	人間社会学部 社会福祉学科	職名※	教授
連絡先	tanakae@fc.jwu.ac.jp		
URL	http://www.		
researchmap※	https://researchmap.jp/emikotanaka		
研究分野※	社会科学		
研究キーワード※	障害(児)者福祉、障害学		
共同研究・競争的資金等の研究課題	障害者の意思決定支援に関する当事者調査(2023年) 知的障害者の自立生活を構築する生活の資源の分析及び理解促進のための伝え方の検証(2021年—2022年) 障害の社会モデルの啓発・理解促進に向けた教材の開発及び授業展開の構築(2017年—2020年) 知的障害者の結婚・子育て生活の現状と支援—子育て支援プログラムの検討—(2015年—2020年)		
社会貢献・産学官連携活動等	品川区障害福祉計画等推進委員会 委員長(2025年—) 品川区障害者自立支援協議会 会長(2025年—) 戸田市障害者施策推進協議会 会長(2020年—) 板橋区地域自立支援協議会委員 人権擁護部会 会長(2019年—) 川口市社会福祉審議会 障害専門部会 会長(2018—)		
受賞歴	なし		

研究領域	社会科学・社会学・社会福祉学・障害（児）者福祉、障害学	3 すべての人に健康と福祉を 10 人や国の不平等をなくそう 16 平和と公正をすべての人に	
研究テーマ※	障害のある人の自立生活の実現に向けた支援・実装のあり方		
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	【研究の背景・目的・内容】 障害者の自立生活(施設ではなく、親との同居でもなく、地域で一人または仲間や生殖家族と暮らす生活形態)の実践は、日本を含む先進諸国で1960年代から始まり、重度身体障害者が牽引してきた。しかし、いまだに十分に行き届いているわけではない。2022年に日本は国連・障害者権利委員会から条約批准国として勧告を受けたが、最も緊急に解決すべき課題の一つとして、障害者の自立生活の実現が挙げられた。特に知的障害者は施設の入所割合も高く、親との同居率が高い。結婚や子育ての希望も実現が難しい。生活環境の改善を図り、障害者が人権を保障され、自らの人生を全うできるような支援、制度などのあり方を研究する。 【応用例、研究の展望】 究極には一つ、具体的には二つの方向がある。一つの方向として、これまで知的障害者の結婚や子育ての研究を行ってきたが、これを、障害者の性と生殖の権利に関する研究として進める。要は結婚や子育てをするしないは本人たちが決めることであり、その権利が保障される社会であることが重要である。 もう一つの方向は知的障害者の自立生活の実現に向けた研究である。自分の意思を示すことの難しさには圧倒的な情報と経験のなさにも原因がある。情報を得て、経験を積みながら、そこにも支援を受けつつ、自らの生活を形成していくことを権利として認める社会のありようを展望する。両者は障害者が様々な支援を受けながら、自らの生活形成していくこと、それを支える仕組や実践、制度などのありようを示すという点で同一である。 【研究方法の特色】 対象が希少であるため、通常スノーボール方式で対象者を増やし、インタビュー調査を行う。		
本研究関連特許・論文等	・田中恵美子 2024「入所施設に入らない選択 重度知的障害者の「自立生活」という地域でのくらしを伝える」パンジーメディア・小川道幸『大空へはばたこう～自立への挑戦～』社会福祉法人創思苑:85-100 ・田中恵美子 2023『障がいをもととして、社会を創る—近藤秀夫と樋口恵子』現代書館 ・田中恵美子 2022「私たちの家族はどう見えますか？—知的に障害があるといわれた私たちが育む家族」松井彰彦、塔島ひろみ編著『マイノリティだと思っていたらマジョリティだった件』ハウレーカ:149-170		
共同研究・外部機関との連携への期待	・知的障害のある人の性と生殖の権利を保障する支援のあり方についての試行 ・知的障害のある人の自立生活を広め、さらに実現を可能にしていくための試行		